

コンケン大学での居候生活 (19)

伊藤信孝

コンケン大学客員教授・工学部

本報では、どうしても心に残る忘れられない一つのことがあり、そのことについて記す。そのこととはチェンマイ大学で知り合ったミャンマーからの「留学生」のことである。日本の大学に在職時代にもいくらかのミャンマーからの留学生と知り合った。筆者自身が直接受け入れた留学生は1人も居ないが、同僚や知人友人の研究室で受け入れられた彼らと知り合いになるのに、それほど時間はかからなかった。その中の一人は日本語も堪能で、また英語も流ちょうに話すことから、筆者自身の所有する農場での農作業や、生育中の稲の状況などを見せに何度も自宅に招き、ついでに村や近くの町などへ案内したものである。その留学生が所定の課程を終えて祖国に帰国してからは、幾度となくもらった名刺のアドレスにメールを送信したが、全く連絡が無くまさに音信不通の状況であった。チェンマイ大学に客員教授として招かれてから数年が経ち、ヤンゴン工科大学でのワークショップをジョイントで行う事になり、また日頃からミャンマーの大学と関係の深い教員の支援もあって、このイベントに参加する機会を得た。事前にこれまでのいきさつを話し、相手側に連絡をして貰い、できればイベント中に逢うことができれば幸であると伝えて貰ってあったが、イベントが始まっても一向に連絡が無い、また連絡をしたと言う相手機関の担当者は「見つけるのは難しい、見つからない、と言う事で半ば諦めて居た。しかし、久しぶりに会える機会を心待ちして何某かの手土産を用意していったが、手渡す機会も無いままにタイに戻る事になるのではと思ひ、イベントが終わる2日前のバンケットで、お世話になった相手側の主要な方々に用意した手土産のいくらかを謝意を込めて手渡し、テーブルに着いている全員に向けてアナウンスをして見た。

実は在職時に私の日本での大学に留学していた学生の一人が祖国に戻って頑張っていると聞いているが、何度も連絡を試みてきたが、全く返信が無い。政府機関に就職して居ると言うことなので、ひょっとしたら皆様方の中でかつての留学生を知っている方が居る野も知れないと言う思いでお訊ねしたい。たいした手土産ではないが、いくらか会えることを期待為て持ってきたが、このままでは持って帰ることになる。もしご存じの方がおられれば、教えて欲しいと切り出した。名前を披露すると、ものの1分も経たぬ間に応答があり、それは私の部署で働いている部下の一人だ、と言う事で早速携帯電話を掛けていただいた。久しぶりに聞くその学生の声に懐かしさがこみ上げてきた。数分間電話で話したであろうか、結局結論は次のようになった。勤務している場所がヤンゴンからかなり遠いところに位置する遠隔地で、これまでもそうであったが連絡がなかなか難しく、明日の夕刻ならそちらに帰り逢うことができるので都合はどうかと言う事なので、OKであると言うことで翌日の夕刻に夕食を一緒にすることになった。そして翌日その時が来た。かつての

留学生は既に結婚していた、夫妻でホテルに来てくれた。車で連れ立って案内されるままにレストランに赴き、久々の楽しい時を過ごした。食事の後は、お土産だと言うことで額縁に入った絵画をくれた。その後3年間でミャンマーを訪ねることが4回ほどあった。相手の勤務の都合もあり、全部で3回ほど逢うことができたと言っている。日本に一時帰国した時にはその留学生の指導教員であった知人に報告し、近況を伝えた。その後ミャンマー訪問の機会はなくなり、また昔の音信不通の状況に戻って今日に至っている。以上は筆者の在職中に会った留学生であるが、ここではさらにチェンマイ大学滞在中のミャンマーからの留学生について記す。知人の教員が受け入れている留学生で、そうした関係もあって知り合うようになった。タイに居るとそこに居るのは全てタイ人と想っていたが、そうではなくミャンマーからの労働者も沢山いる事を知った。大学構内で偶然出会ったその留学生の一人が、気付かぬ私に声を掛けびっくりしていると、「何をしているのか」と聞くので買い物帰りだと応えると、買い物袋の中を覗き、チョット待ってくれと言う。ものの10分もしたであろうか、その学生がバイクの後ろに乗せて貰って筆者の所にやってきて「口に合うかどうか分からぬが、食べてくれ」と小さなエビで一杯のプラスチック箱を手渡してくれた。バイクの運転手はミャンマーからの出稼ぎ労働者で、ここで働いていると言う。留学生達は機会を逃さず、国際学会やシンポジウムに出席し、論文発表を行っている、チェンマイ郊外のラジャパット大学でのイベントでも地元タイの学生達を抑えてベスト・プレゼンテーション賞を獲得した。筆者は意気に感じてそうしたときには、知人の指導教員も含め、更なる励ましの意味を込めて夕食に招き、あるいは小さなプレゼントを用意し、元気づけている。筆者に取ってはそれが自分にできる買う少ない事の一つと認識して居る。「せめてそれぐらいはしてやりたい、させてくれ」との思いでもある。とにかく若い世代の成長を見るのが嬉しいと言う素直な気持ちである。コンケン大学への移籍が近づいた頃、適当な時期に彼らを指導教員と共に夕食に招きたいと想っていたので、事前にその旨を伝えてあった。しかし一方では筆者のための送別会を別の教員が計画して頂いて居たが、その催しについての連絡をスタッフが忘れていたということが分かった。結局、設定した会食の日が同じ日であった。しかも連絡してあった指導教員と留学生は「今から出向いて一緒に夕食に行こう」と言うことであった。そして彼らが筆者のオフィスに到着したその時に、ダブル・ブッキングが判明した訳である。送別会は筆者のためのものであり、筆者がメインゲストであるからキャンセルするわけには行かない。かといって一方では既に指導教員と留学生が筆者の招待でオフィスに来ている。どうするかを即決しなければならない。スタッフに頼んで一緒にレストランでの会食が可能かどうか依頼した。予想通り筆者を招待して頂けるホストの教員からはOKが出て、筆者とその招待する客である留学生2人とその指導教員もまとめて面倒見ようというホスト教員からの有り難い話しとなった。まさに心温まる対応であった。筆者の送別会を兼ねた夕食会と言うことで、わざわざBKKからホストの教員の関係者、友人も含めて招待されており、その配慮には頭が下がった。さて2時間ほどの夕食会を終えて、楽しい時間があっという間に過ぎた。留

学生と指導の教員が、その日の夕食会のために用意したという手土産を持ってきてくれた。留学生は留学生なりに、コロナ禍のもとでマスクと「ぺんてるブランド」のボールペンを、また教員は高価な電子腕時計（スマート・ウォッチ）とそれぞれが手渡してくれて本当に嬉しかった。私の夕食への招待という行為に対する感謝の意志表示である。その姿勢が余りにもけなげに見えてほほ笑ましく、鮮明な記憶として脳裏に残っている。コンケン大学に移ってから、年末を迎えコロナ禍とは言え、いくらかクリスマスムードが漂う年末から正月に掛けていやがおうにも気分は少しばかり賑わいを見せていた。タイでは日本とよく似た風習があり、お世話になった人には日本ではお歳暮を贈るのが一般的であり、タイでもこれに類似のしきたりがある。チェンマイに居るときも幾度か同じ事を経験したし、此方からもそうした贈り物を贈った事もある。お世話になったチェンマイ大学の先生に節目として、何かしたいと考えたが、何をどの様な形で対応すべきかを考えて居たが、結局お世話になった研究プロジェクトのスタッフの一人の口座にいくらかを振り込み、そのスタッフから適当なものを購入為て届けて貰うという形を取った。ついでにミャンマー留学生とその指導教員へもいくらかを届けてもらう様依頼して、食事でもしてもらおう様連絡をした。数日して金額を記載した大きめのプラカードをそのスタッフから指導教員へ手渡す譲渡式（？）の如きセレモニーを撮った写真が送られてきた。その後、留学生からも「おかげで美味しい食事をご馳走になりました、有り難うございました」と言うメールが届いた。長引くコロナ禍でコンケン大学に移ってから既に半年にも成る。チェンマイの彼らはどうしているかと想いつつ過ごしているところにミャンマーではクーデターが起きたと言う一報が入り、驚いた。一向に収まること無く規模は日々多く、既に多くの死者すら出ていると言う。事態の詳細はともかく、多くの死傷者が出ていることは悲しく残念なことである。また折角多大の時間と予算を投資して育成した将来ある人材が、運悪く死に至る様な事があっては成らないと想うと極めて残念である。そう想うと急に悲しくなってきた、これからどうなるのかと不安に駆られるのは筆者のみではなかろう。一刻も早く安定した日常生活が戻って来る事を願わずにはおれない。日本のコロナ禍も同じで、良くなってきたかと思ひ、少し基準を緩めると急に感染者が増え始める。一刻も早い安定を期待したい。



図1 スマート・ウォッチ（上）



図2 コロナ対応のためのマスク

ぺんてるボールペン（下）

セット